

# 流行歌から見た東京

—その社会経済的展開—

柴田 徳衛

## 目次

1. 東京発展の前史
  - a) 江戸時代
  - b) 終戦前後
2. 戦後米国の対日政策
  - a) 農地改革
  - b) 三チャン農業と若年余剰労働力
  - c) 集団就職列車
3. 東京の労働吸引力
  - a) 日本経済の急成長—特需景気
  - b) 海外から見る東京の都市化
  - c) なぜ東京へ行くと異郷の人と婚姻を？
4. 江戸時代の再発見
5. 東京の近未来
  - a) 農村の変化と若者の減少
  - b) 老朽化の進行
  - c) 基本的方向転換

## 1. 東京発展の前史

### a) 江戸時代

徳川家康により1603年江戸開府が行われ、東京湾頭の小漁村も「参勤交代」という世界に例のない（注）徳川幕府の中央集権的支配機構を通じ、江戸は間もなく人口百万を前後する世界的大都市となった。最盛期における機能分布を土地所有面積から見ると、江戸城・旗本屋敷や全国からの大名屋敷などの武家地（支配階級用地）が全体の6割、神社仏閣の社寺地が2割、町人地が残り2割ほどとされる。だが江戸後期になると町人層の活動規模拡大につ

## 流行歌から見た東京

れ、丁稚・小僧や大工・左官（しゃかん）などまでを含め、特に下町の人口密度が稠密となり、災害に弱い9尺2間の木造零細借家地域が大きく拡がり「火事と喧嘩は江戸の華」と呼ばれるほどになった。

明治維新となり「ご一新」と呼んですべてが新しく変わるとされ、江戸も東京と改名された。結果として天皇制支配の宮城（皇居）を中心に、政治支配の霞ヶ関・永田町、大企業支配の丸の内・日本橋から兜町、文化・教育の神保町や本郷区と全国を支配する中枢地がそれぞれ拡大した。しかし下町に多い零細な木造借家の密集状態そして地主・家主と借家人の所有関係などは、江戸時代のまま温存された。

（注） 厳密には、江戸開府より8年後の1611年に、ポーランドで首都がワルシャワになるのとともに、コリディカと呼ばれる各地の封建領主がこの首都にいわゆる大名屋敷を構え、権勢を振るうケースがあった。だが18世紀70年代に、この首都における大名屋敷式の制度は消えた。

## b) 終戦前後

昭和16年12月の真珠湾攻撃により、日本海軍は大戦果をあげたが、それに喜び慢心する間に米軍側は日本軍の戦略や暗号解読に研究分析を大きく進め、翌17年に入るや日本はミッドウェイ海戦の大敗北に続き、ガダルカナル島の撤退、アッツ、キスカ島……の玉砕・サイパン島の敗北と続く。日本側戦線はそこで各「玉砕」の一言で終わるが、米国はそこに残された暗号書（乱数表など）、戦死した将兵の懐中に残された留守宅からの手紙、日本側捕虜兵への同郷出身の在米日系2世による訊問など膨大な資料を米軍本部に集め、日本内部の生きた情報分析を詳しく進めた。だが米国はまだ日本の残存軍事力を恐れ、終戦の年2月4日ヤルタ会談でルーズベルト、チャーチルはロシアのスターリンを招き対日戦争への参加に同意を得た。この間に米軍による東京空襲が繰り返され、特に終戦前3月10日の下町木造密集地への焼夷弾攻撃では多くの死傷者が出、さらに東京全体も焼け野原に近くなった。

## 2. 戦後米国の対日政策——農地改革

米国大統領ルーズベルトは、硫黄島における栗林中将指揮下日本軍の巧みな戦術などを通じ日本の軍事力をまだ過信し、ロシアのヨーロッパ戦線での勝利とその軍隊の東方満州への転進を期待していたが、4月12日に突然死去し、トルーマンが即日大統領職を継ぐ。新大統領はここで日本の崩壊近いことを知らされ、対日戦後政策の立案に急ぎ迫られた。彼が第一としたことは、スターリンによる北海道・東北日本への侵入を抑える事であり、第二に戦時下に極度に貧困化した日本国民の戦後における反乱・赤化傾向を止めることであった。数十万に及ぶシベリア抑留日本兵が日本帰還後その赤化運動が東京はもちろん全国に伝播しそ

なことも大きな憂いだった。

#### a) 農地改革

大正・昭和と日本経済が急発展し、同時にアジア大陸に軍事的侵略を進められた背景には、その社会基盤たる農村に広範な地主・小作制度があり、多数の零細小作農とその家族が都市工業部への低賃金労働と海外侵略のための兵員とを豊富に供給できたことがある。しかし惨めな敗戦により、小作農民家族の低い生活水準への反感が表面化し、ロシア社会主義の赤化運動が日本全土に拡大することを米占領軍側は極度に恐れた。かくて昭和 20 年 12 月から 21 年 10 月と 2 次にわたる農地改革が強行され、結果として大地主の存在は消え、保守の基盤となる零細自作農が日本全国に拡大した。なお戦前上記農村の地・小作関係を背景に山田盛太郎「日本資本主義分析」などをめぐり講座派と労農派と論争が続き、コミンテルン 32 年テーゼまで介入してきたが、不幸にも当局の弾圧により国内における論争や研究は中絶してしまった。皮肉にも、米国の日本研究者はこの論争に関心・研究を深め、戦後米国の対日政策にも貴重な影響を与えている。

#### b) 三チャン農業と若年余剰労働力

戦後、上記のような農業経営規模の零細化に加え、小型機械（トラクター）の導入や肥料の改良普及などにより、農作業の省力化が大きく進んだ。そのため農業労働の主な担い手は、一家における主婦〔カーチャン〕と高齢の〔ジイチャン・バーチャン〕の三者で十分にすみ、主人たる〔トーチャン〕は道路工事（公共工事）や東京など大都会への出稼ぎで、現金収入を稼ぐ役割を担った。こうして一家における長男・長女や次男・次女の元気な若年労働は、農村地域内では不要な余剰となった。さらに新しく採用された新教育制度（いわゆる六三制）が加わり、都会の近代的生産活動に十分適応できる教育水準の上記新制度卒業生が、昭和 29 年あたりより農村部から東京の労働市場へ続々と現れ始めた。このまさに 29 年に登場したのが流行歌「東京へ行こうよ」だった――

東京へ行こうよ	東京へ	思うだけでは	きりが無い
行けば行っただ	何とかなるさ	どこか都の	片隅で
生きて行こうよ		東京へ行こう	

さらにまた同じ 29 年に「ああ上野駅」が現れる――

……

就職列車にゆられて着いた	上野は俺らの心の駅だ
お店の仕事は	辛いけど

流行歌から見た東京

胸にやでっかい

夢がある

### c) 集団就職列車

都市化過程で見られた日本的集団就職は、昭和 29 年前に東京都の援助で東京世田谷の桜新町商店街から始まったが、忽ち全国に普及し、交通公社の協力で集団就職列車が普及し、最盛時には年間 38 万人近くの若い新中高校卒業生がこの集団列車で大都市特に東京へ卒業期の 3・4 月一斉に流入し就職した。東北地方から若い新就職者が多く集まる上野駅では、東京都労働局の職員が大きな旗を振って出迎えて若い新卒業生を受け入れ、新職場の主人たちに紹介し引き渡した。海外では、集団列車のこうした形は戦時の軍事動因以外に見られない。

## 3. 東京の労働吸引力

### a) 日本経済の急成長——特需景気

かくて昭和 30 年を転機として、東京の人口急増が始まる。人口統計でなく、東京都庁の予算編成者の実感から言えば、小・中学義務教育における校舎や教室の新增設や教員の増員、上下水道の施設増などで、毎年人口が 30 万ずつ増えるようだった。まさに東京に地方の大都市が毎年一つずつ増える形である。

かかる人口急増は、前記地方農村からの流入圧力のみならず、東京自身の経済発展とそれによる労働需要の増大を見ねばなるまい。

後者の背景を日本経済に求めると、転機は昭和 25 年 6 月 25 日に勃発の朝鮮戦に始まる。北朝鮮側は相手を軽視し、我こそ人民解放軍なりのつもりで当初破竹の勢いで南下した。しかしそこへ強力な米軍が突如南から仁川上陸作戦に出てきた。だがまた次の段階で、米軍自身にも想定外だったようだが、年末に北から精鋭「中国人民義勇軍」が鴨緑江を越え南進してきた。ここでまさに大国同士たる米・中の大会戦が始まる。

巨額の軍需物資の需要が、隣接日本に舞い込んできた。貧しい戦後の復興に喘いできた日本にとり、これはまさに「干天の慈雨」であった。人口 13 億で膨張する中国は、米国にとり日本が頼もしいアジアの防壁であった。日本はエネルギー資源が建国以来不足に悩んできたが、昭和 30 年中頃を転機に米国から石油の豊富な供給が認められた。おかげで、一方では四日市などで巨大石油化学コンビナートの建設が開始され、他方では自動車の大規模生産が始まる。こうして政府の経済白書が昭和 31 年 7 月「もはや戦後ではない」と勇ましく宣言し、同 35 年あたりから市民の主要生活素材が従来の木材・竹・紙から、プラスチック、鉄、金属の時代に入る。

この昭和 34 年に早くもブルーバード、パブリカが店頭に見え、「マイカー元年」を祝い、同年東京都内でもより多くの自動車がより速く走れるようにと「首都高速道路公団法」が交

布される。その後、国内道路投資額がやがて年間最大 15 兆円を超え日本経済発展の大きな梃子となるし、自動車産業も王者米国を凌ぐ勢いに至る。自動車の道路走行距離が増えれば、ガソリン税など道路特定財源の収入も増え、それだけさらにまた道路建設の公共投資額も増える。

#### b) 海外から見る東京の都市化

戦後世界経済発展の過程で、各国共通で都市化が進展するとともに、そこに各種の問題が起きて来た。それらの経験を交流し、相互の役に立てようと国連主催によりサンフランシスコで国際会議が開かれた。各国の都市問題担当者が集まり、私も東京都を代表する形で参加した。私は先方が理解しやすいようにと、東京を巡る流行歌を英語かフランス語に適宜意識して報告した。具体的には昭和 30 年を転機として東京への強力な人口集中現象が現れたとして、それにまつわる流行歌を紹介した。だがそれらの歌の内容が、海外特にインドなどの代表から、強く不可解だとの反応が出てきた。例えば「お月さん今晚わ」で

こんな淋しい田舎の村で	若い心を燃やしてきたに
可愛いあの娘は	俺らを見捨てて
都へ行っちゃった	

と大きく嘆き泣くのである。これは東京への若者流入が本格的に始まる直後の昭和 32 年発表の歌である。インド代表（他の参加者も皆ほぼ同じく）が、この内容は不可解と私に質問してくる。その趣旨を、仮に日本的具体的に項目別に表現すると――

仮に九州鹿児島島の農村で愛し合った若い男女のうち女性が東京に就職したとする。ところが彼女が鹿児島島の旧友を軽く振り捨て、隣の職場にいた秋田出身の男性と仲良くなり、結婚して秋田に行ってしまったとする。この流行歌の歌詞は、鹿児島に残された男が悲嘆に暮れ毎日泣き崩れている……との意味である。ところが、この句にたいしインドないし他の多くの海外都市代表の反論や疑問を日本流に表現すると――薩摩（鹿児島）出身の彼女は、鶏肉や薩摩芋による「薩摩汁」が大好きだろう。だが他方、秋田出身の男性氏は、ハタハタ魚の塩汁（シヨツツル）が好きなはずだ。「薩摩汁」の好きな彼女と「塩汁」の好きな彼氏の二人が、一緒の夫婦として毎日暮らせるはずがないではないか。嗜好の点から、「彼女は必ず伴侶を郷土料理薩摩汁好みに求め、郷里薩摩に戻るはずだ。」とインドなり海外諸都市の人々は私に質問するのだ。

また同じような趣旨の別の質問が出る。趣旨は――日本の各地にそれぞれの「方言」があるはずだ。東京ではかなり標準日本語が普及したと聞かすが、まだ中年以上の高齢者間には地域の方言が残っているはずだ。薩摩弁に馴れた彼女が結婚して秋田弁の中に入れば、昔ほど

流行歌から見た東京

ではないにしても、秋田では薩摩弁は一切通用しないだろうから、やはり不便をしよう。その点、彼女が故郷の鹿児島に帰りそこで彼氏と一緒になれば、生活に全く不便はないではないか。インドなどでは各地それぞれ自分たちの方言を何百年の伝統だと尊重し、外から急にそれを変えろと強制が来れば、「俺たちの生命を奪うのか」と必ず血の雨が降る争いになる——というのだ。

次に同じく宗教ではどうか？ 海外の質問者が私に問うのは「日本の内部だから、地域によりキリスト教とユダヤ教といった極端な差や争いはなからうが、村により宗旨の差はある。同じ仏教でも、仮に真言宗の主流だった鹿児島の村から日蓮宗が主流の秋田の村のお嫁さんに来たとなれば、冠婚葬祭の際のみならず、日常生活にも不便はないか？ インドなら仮に働きに大都会に出ても、宗教の派閥の関係で、まず自分の故郷に戻り同じ宗派の彼氏と一緒にいる——のが常識だといういみの質問である。

海外からのお客さんを、都内に案内することがある。大きなお屋敷の一角や街角によくささやかな祠（ほくら）があり、お稲荷（いなり）さんが祭られている。その前に狐の像が置かれていたりする。祠の前の通行人がよくこれを拝んで、狐のまえの賽銭箱に10円玉か100円玉のお賽銭を投げこんでいる。案内していた外国人が不思議がり、「お稲荷さんは神道か仏教のどちらか？ 仏教とすればどの宗派に属するのか？ さらにお狐さんにまで賽銭をささげるのは何故か？」などと私に質問だ。これは私にとり難問である。「よく分からない」と答えると、{自分でも拝んでいるくせに分からないとは。お前はそれでも人間か}という顔をされる。

先方が分からないとする第3の質問は以下のようなようだ。日本では義務教育がよく全国統一されているが、国によりそれが不徹底で、自分の出身地と彼氏との結婚先とで、教育水準の差の大きい場合がある。やはり自分の生まれ故郷に戻り、昔なじみの彼氏と一緒にいるのが安心だろうというのだ。確かに発展途上国となると、義務教育まで届かぬ国なり地域はかなりある。方言が各種異なり、教育水準がバラバラだと、大工場で組み立て一貫作業を命令一斉に進めようとしても、困難・不可能な場合が多い。

既に紹介した {お月さん今晚わ} 以前の昭和30年に現れた「別れの一本杉」だが——

泣けた 泣けた      こらえ切れずに      泣けたっけ  
あの娘（こ）と別れた      かなしさに      山のかけすも      泣いていた

趣旨はこれと同じだが、昭和34年発表の「僕は泣いちっち」を紹介すると——

僕の恋人東京へ行っちっち      僕の気持ちを知りながら

なんで なんで なんで            どうして どうして どうして  
東京がそんなにいいんだろ        僕は泣いちっち 横向いて泣いちっち

守屋 浩の歌だが、せっかく村で仲良しになり結婚まで考えていたのに、彼女は東京へ忽然と消えてしまった。捨てられた僕はただ泣くばかりとの趣旨である。

なぜ恋人が郷里に戻ってこないのか？ 東京へ行くと、なぜ僕を忘れて身近な男とすぐ一緒にになってしまうのか？

### c) なぜ東京へ行くと、異郷の人と婚姻を？

せっかく田舎の村に育ったのに東京へ就職し、方言や食べ物の嗜好や宗教など幾多の差や困難があるはずなのに、東京で知り合った全く別の村なり町の男と一緒にするのはなぜか？ ……なぜ日本ではこうしたことが多く起こるのか？

海外からの質問のポイントを、項目別に整理すると以下のようになりそうだ。まず地域による方言の差。例えば既に述べたようにインド（そして他の多くの地域）では、自分の村なり町の方言を先祖からの宝とし、他の地域の言語を強いられれば、それに抵抗し反対する闘争が起こる。日本では例えば薩摩弁と異なる言語を強いられれば必ず薩摩の土地で戦乱が起きたろう。西南戦争ではそうした要因があったのか？

また教育水準で見れば、最初に小学校をつくり、その先生（訓導）を揃えるのは可能だろう。しかしその訓導を養成するために師範学校の建物は建築できても、そこで訓導を教えるレベルの高い「教授」はどうして要請し揃えられるのか？ 新興の発展途上国を考えれば、その水準の高い教授たちは、英国とか米国といった先進国の大学に留学させる以外養成できない。日本では明治維新後、ここをいかに解決したか？

先のサンフランシスコにおける都市化をめぐる国連会議の場で、こうした質問が私に集中したのである。

海外の政治指導者から見ると、日本の明治維新が、大変不思議に見えるらしい。義務教育という常識では何十年も必要としそうな大事業が、海外から見ると、東京ないし広く日本全体でも、確かに僅かの期間で実現したように見える。制度的に見ても、明治5年の「学制」から「小学校令」の僅か10年余の間に、義務教育制度が全国に広く普及している。方言なども同じようだ。変えようとすれば国や地域により血の雨の降る深刻な問題でも、東京や日本全体を見ても、比較的短期間に標準日本語ないし東京語なる共通語が普及している。海外の特に発展途上国の経験から見て、これが不思議とされるのだ。

私はかつてポルトガルから空路北アフリカのサハラ砂漠上空を越え、ナイジェリアの北部都市カノーに着陸した。日本から学者が来ると伝え聞いたのか、数人の新聞記者に囲まれ、質問の嵐を受けた。要点は「明治維新とは何だったのか？ それ以前はチョンマゲのサムラ

イ後進国が、明治維新という「魔術」で一夜にして欧米先進国に発展したと聞く。その秘密を教えてください。わが国はいまアフリカの後進国から一挙に先進国になろうと国をあげ熱気に燃えながら努力をしている。日本の明治維新という秘密を我々もぜひ学びたいのだ。」というのである。飛行場での突然の熱心な質問に、こちらも戸惑うばかりだった。あらためてこのナイジェリアでの質問、そして当国連研究会での東京の都市化にまつわる質問にいかにかに答えるか、いささか私なりに考えてみた。

#### 4. 江戸時代の再発見

以上は私にとり、日本に在住して従来あまり考えなかった海外からの質問であるが、改めて考えると、本論の当初に触れた「江戸時代」に幾つかの鍵がありそうだ。従来江戸時代は鎖国で、先進世界から文化的に後進国に取り残された時代とみなされ易かったが、別の視点もありそうだ。まず第一にヨーロッパ諸都市に比較すると、悪名高き豊臣秀吉の朝鮮征伐以後、1853年にペリーが黒船で来航するまで2世紀以上もの間、日本は海外へ侵略する意図も、侵略される心配も一切なしで過ごして来ている。少なくとも2世紀半にわたり、全く国内は平和に過ごせた。本論冒頭に「全国から江戸に大名屋敷が集まり」と述べたが、当初は方言も食物嗜好も大きく異なる大名が、全国各地から集まったわけである。そして各大名屋敷には、国元から勤番（きんばん）侍と称する武士が、相当期間江戸に派遣されてきた。この勤番侍は当然江戸城中で他藩の侍たちと交流し、また出入りの商人たちにも接している。その際には、自藩の方言だけでは済まされず、將軍ないし他大名幹部の用語を用いたはずである。ここから江戸城内ないし大名屋敷全体を通じ、相当の共通語が使われたはずである。方言自身は自分の藩内に守られたとしても、江戸城内で通用する共通語は、將軍や大名家臣に接する町人間にも同じく利用が拡大したろう。明治維新で突然標準日本語が成立し、全国に強制されたのではなく、東京語にかなり近い標準日本語が、明治維新以後あまり無理なく比較的短期間に普及したようである。

ニューヨーク市など南米やアジアからの移民が多く集まり、それぞれの言語がスペイン語やら中国語、韓国語など各種と異なるのみならず、母国の教育水準がまた色々異なるので、工場の生産活動などにも、命令伝達の相互コミュニケーションにも困難に直面する。インド一国内でも、義務教育を普及させるためには、前言したように小学校に教員（訓導）を揃えねばならず、そのためには多くの訓導の言語を統一せねばならず、それを育成するための高等レベルの教授を多数養成せねばならない。そのためには多数教授候補を、先進国に数年間留学させねばならない。これは、非常に困難である。日本では明治維新後比較的早期に義務教育が実施されたように見えるが、どうか。やはり江戸時代の「寺子屋」の普及が見逃せない。特にそこにおける十分能力ある教員（後の訓導）の調達・普及であるが、その点当時は

寺院の僧侶や神社の神官が大きな存在であった。さらに意外にも、武士にたいする浪人の比重も大きかったことが注目される。徳川幕府の外様（とごま）大名統制のため、よくその改易、減俸が行われ、武士の失業が多く時に50万人近くにもなる浪人が町にいたと。これが寺子屋のよき指導員になったと解される。他方町人勢力の向上とともに読み書きそろばんの達者な小僧、丁稚の需要の大きかったことも見逃せない。江戸町人たちの教養、文化水準の高さが、世界に誇れる歌舞伎や浮世絵を支えたと解したい。

## 5. 東京の近未来

### a) 農村の変化と若者の減少

東京をめぐる流行歌を幾つか紹介した。沢山ある中には「東京よ あばよ」とか「東京がだめなら丸々市があるさ」式の、東京で失敗したから退却するとの内容もあるが、昭和30年代から40年代の「得に所得倍増計画時代は、戦後貧しく辛い時代を経てきたが、いよいよ東京もこれから発展の時代に入りそうだ、「胸にゃ でっかい夢がある」式の未来への期待感を示す流行歌が多く出ている。

さて今後の東京はどうなり、都民生活は如何になるだろうか？、それを背景にして、いかなる流行歌が出てこようか？ これからの近い将来東京は如何になるか？ これまで東京の発展の要因を振り返れば、なんと言っても昭和30年代以後、若者が地方農村から毎年大量に流入し続けた要因が大きいのである。それが最近憂えるべき兆候がはっきり出てきている。これまで東京の成長を支えてきた地方農村部に、大きな転換の進む事実が無視できない。すなわち三ちゃん農業における主力カーチャン、パーチャンの高齢化であり、若者の流失そして消失である。いま農村で農地を耕作する労働力が減少している。

農家の耕地面積を販売農家についてみると、1990年の420万ヘクタールから2911年には201万同と半減だ。そこで働く就業人口が同じ期間に849万人から421万人と減り、その同じ期間に65歳以上の高齢者の比率は、33.1%から60.6%とまさに倍増だ。作業の労力不足のためか、耕作放棄地が、同じ期間に21.7万ヘクタールから39.6万ヘクタールとまさに倍増である。それだけ農村から東京へ流入した若者が減少しているし、地方農村に過疎地が拡大しているとも表現出来よう。

### b) 老朽化の進行

東京が世界の大都市と誇れた特色は、年齢別人口構成のピラミッドが菱形、つまり中心の若者層が一番大きく横に広がり、老年と幼少年とピラミッドにおける上と下の層が小三角形をなしていたのである。ところが若者の流入減少とともに子供の数が減少し、他方高齢者の数が増大している。

## 流行歌から見た東京

若者中心だった東京が年とともに高齢者が増加する形に変化している。底辺の大きい三角形から頭の大きい逆三角形に成りつつあると表現してよい。これは物的面も同じである。昭和34年のマイカー元年から、道路・高速道路の建設が十分に進んだと述べた。それから半世紀、東京の誇る高速道路、そして隅田川などにかかる橋梁などが一斉に老朽化している。

かつて若夫婦の憧れだった近代的団地のコンクリートも老朽化が確実に進み、雨漏れや給水管からの漏水も待たなしに進行している。これらは、どうも憧れや夢の流行歌となり難い。

### c) 基本的な方向転換

根本的対策をいかに立てるか？ 基本的方策は、地方農山村を振興し元気で優秀な若者をそこでより多く育成することとなろう。それには明治いやそれ以前から長い伝統であった中央集権を打破し、地方自治を強化すること、それには財政で地方財政を強化すること、さらに税制において地方税を強化することなどと具体的には本論分での範囲を大きく超えることとなるので、その方面の研究者のご努力を期待したい。ともあれ楽しく心温まる流行歌の普及を今後も期待したいが、その背景に東京そして日本社会経済の基本歩行まで考えたい——戦後の荒廃から幸いここまで日本そして東京は発展し、楽しい流行歌も沢山出来たが、従来の方向をこのまま進めると、事態はそのまま従来と逆方向の老朽縮小化の方向へ進み、楽しく元気の出る流行歌が生まれる余地も消えそうだと述べておきたい。

後書き：拙著「世界の都市をめぐって」（岩波新書）取材でアフリカ・中南米などの都市を巡り、地元の研究者との交流に東京を巡る流行歌を紹介した。と思いがけない質問を受けたので、解説を本稿にいささか載せてみた。今後も八百万（やおよろず）の神とか、千代田区内だけでも64ある稲荷（いなり）神社などを海外に紹介してみたい。私が十分ご教授頂く暇なく他界された加藤裕己先生も、天国から苦笑しながら私の研究を見守って頂きたい。